千鳥橋上より

鵜戸

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷

暑中御見舞申し上げます

ごあいさつ

宮司　杉田秀清

日本は飽食の時代といわれ、ややもすれば私たちは食べ物に対して感謝の念がなおざりになっているように思われます。

私たちは、当たり前のように一日三回の食事をし、おなかがすけば間食もします。身の回りの物は、デパート、コンビニ等に行けば、たいていの物は簡単に手に入ります。私たちの食べ盛りであった昭和二十年、三十年代の食べたくても何もない時期に比べて、今は生活して行く上で、何の不足も不自由もない時代です。

日本民族は古来より、豊かな自然の恵みに生かされてきたと同時に、自然の猛威を恐れ、畏敬の念をもって自然と接し、自然の営みの中に神を見出してきましたが、生活が豊かになるにつれ自然の恵みに対し、感謝する心が薄れてきたのではないでしょうか。

本居宣長翁の玉鉾百首の中に〝天地の神の恵みしなかりせば一日一夜もありえてましや〟とあるように、大自然の恵みに「ありがたい」という感謝の念を持たなければなりません。

「自然の恵み、食べ物の大切さを思い起こしてもらうには神社では何ができるのか」このことを考えると、日本人には米作りがあります。日本の文化は、米作りを中心とする農耕文化を基盤として成立しています。米作りを体験し、収穫の喜びを知り、日本古来から伝わってきた稲作文化を見直すことが大事だと思います。

当神宮でも、かつては田植が行われていましたが、時代の流れの中で途絶えてしまいました。このことを思うと残念でなりませんでした。しかし、稲作をするという一つのことを通じて、青少年とふれあう教化活動にもなり、又、地域活性化の一環にもなると考え、昨年秋より準備を進め、四月には御田植祭を斎行することができました。

これにより、二月十七日の祈年祭で五穀豊穣を祈り、四月の御田植祭で田植を行い、天候と苗の成長を気にしながら育て、抜穂祭にて稲を刈ります。そして、十一月二十三日の新嘗祭には、御神田で収穫された米をお供えすることができます。

これら一連の流れを行うことにより、私たちは農耕文化を思い起こし、米作りの大変さ、自然のありがたさが実感できるのではないでしょうか。又、何よりも氏子とのつながりが、より一層深まると思っています。

末筆ながら、皆様方の益々の御健勝をお祈り申し上げ御挨拶と致します。

例祭斎行と奉祝行事

二月一日午前十時三十分より、献幣使　後藤俊彦氏（高千穂神社宮司）御参向の元、例祭が厳粛かつ盛大裡に斎行された。

当日は晴天にも恵まれ、責任役員、氏子・崇敬者総代をはじめ、四神宮（英彦山・霧島・鹿児島・宮崎）の各宮司、県内外の各神社宮司、官公衙関係、日南市・北郷町・南郷町の各地区々長、全国各地の崇敬者の参列を賜り、多くの御供物が奉納された。

祭典では、献饌の上、宮司の祝詞奏上に続き本庁幣が献ぜられ、献幣使の祭詞奏上の後、当神宮神職による舞楽〝蘭陵王〟が奏舞され、厳かな中にも華やかさがそえられた。

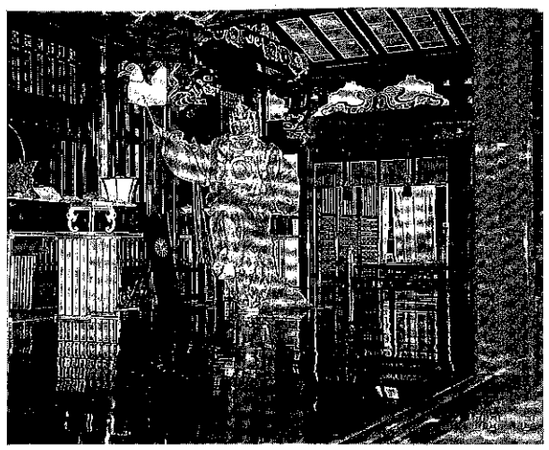
又、祭典に先立ち福岡藩伝柳生新影流兵法　第十四代宗家長岡鎮廣氏他によって、代々受継がれて来た兵法が奉納された。

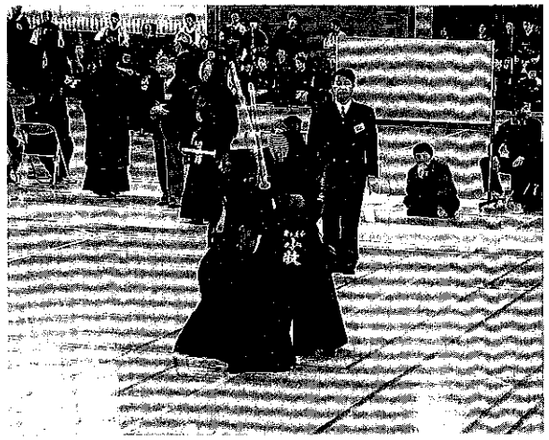
境内儀式殿前広場に於いては、奉祝行事として「第二十八回鵜戸神宮奉納四半的弓道大会」が開催された。当日は県内外より、七十五チーム、三百四十名が参加し、和やかな雰囲気の中にも鋭い眼差しで弓を射っていた。

二月六日には、第四十七回剣法発祥鵜戸山顕彰剣道大会が開催された。

本来は鵜戸神宮儀式殿前広場が会場であるが、当日は生憎の雨となり、日南市の日南総合運動公園多目的体育館で行われた。

大会には県内外の各地から、男子団体一二五チーム八七五名、女子個人二四一名が出場し、昨年を上回るチーム・選手数で、白熱した戦いが繰り広げられた。





祈年祭斎行

二月十七日午前十時三十分より、今年の五穀豊穣と国家の安泰を祈る祈年祭が厳粛に斎行された。

当日は、責任役員、氏子・崇敬者総代をはじめ多数の参列を賜り、宮司以下祭員によって奉仕され、宮司祝詞奏上の後、当神宮巫子による「浦安の舞」が奉納された。

本来わが国の文化は、米作を中心とする農耕文化を基盤として成立しており、この祭典は古代より行われてきた重要な祭である。

御田植祭斎行

四月二日、午前十時三十分より日南市大浦の御神田において御田植祭が斎行された。

御神田は、大浦地区の氏子、泉昭信氏、関屋勝氏の休耕田を借り受け、三月五日に斎田清祓祭を斎行。この日に向けて準備が進められてきた。

祭典には責任役員、氏子・崇敬者総代他多数の参列を賜り、又、地元小中学生、JAはまゆう職員による早乙女姿での田植えも行われ、古式ゆかしい伝統行事が復活した。

当日は、あいにく小雨が降り四月にしては、やや寒い日であったが、御田植祭には支障はなく祝詞奏上の後、御田植の儀が行われ、雑色(ぞうしき)姿の田長(たおさ)の「お田植、始めませ」の掛け声を合図に、編みがさ、かすりに赤いたすき姿の早乙女十八名と児童たちが、注連縄の張られた御神田に、はだしで入り楽の流れる中、冷たい泥田に驚きの声をあげながらも、もち米とコシヒカリの苗を一本ずつ丁寧に植えていった。

初めて田植をした早乙女は、「昔の田植の大変さが少しは分かった気がします。貴重な体験をさせてもらいました。これからも是非続けてほしい」と顔についた泥を落しながら話していた。

御田植は、鵜戸の宮居(昭和十七年)によると、

神供田は二神山にあったが、今は所在を失っている。

鬼束綱快は、

大御田の　玉の若苗　とりそめて　みあへすすきし夏はきにけり

と御田植を詠じている。

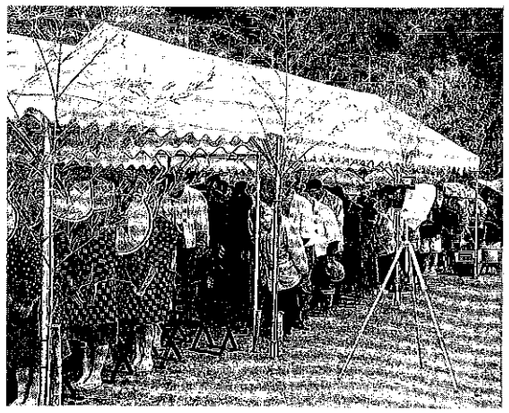
と記されている。(綱快は江戸中頃の人物)又、鵜戸の宮居には記されていないが、楠山の湿地帯は昔の御供田だったとの言い伝えもある。

これらのことから御田植は時代の流れの中で衰退していったと考えられる。

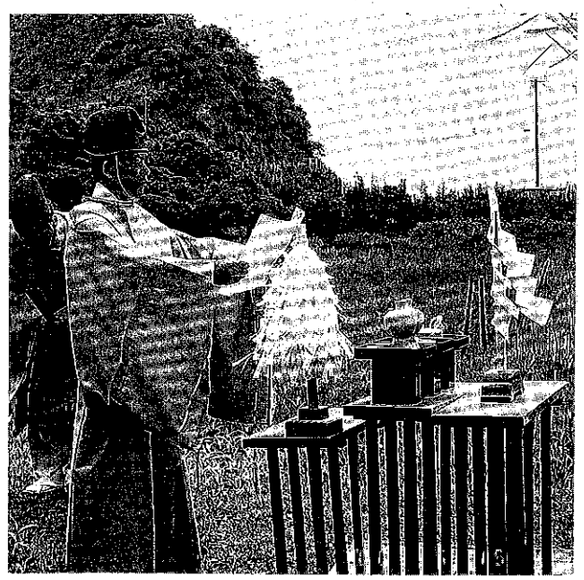
この祭典は、古来より受け継がれてきた日本の食文化の基である稲作を、氏子や崇敬者にも広く知ってもらい、後世に伝えていくべき大事な行事であるとの観点から執り行われた。

尚、JAはまゆうと大浦地区氏子の皆様方には、御田植祭に対しまして全面的な御協力を頂き、紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

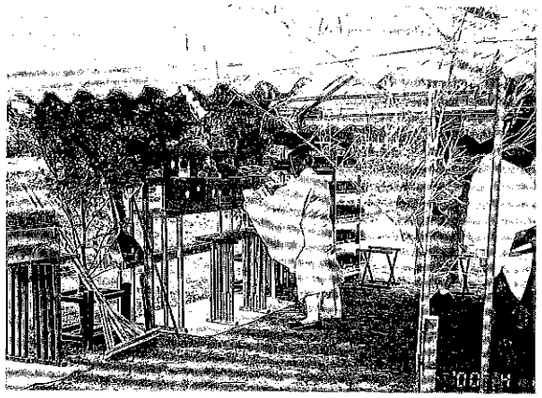
斎田清祓祭

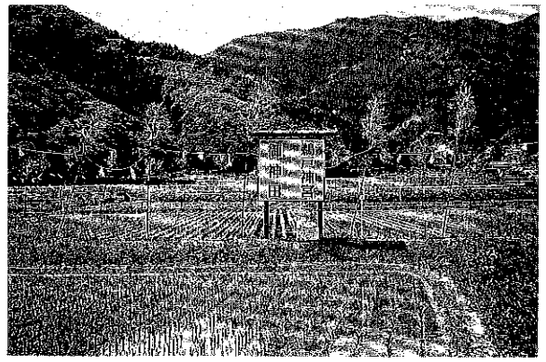


御田植祭



御神田月次祭





御　田　植　祭

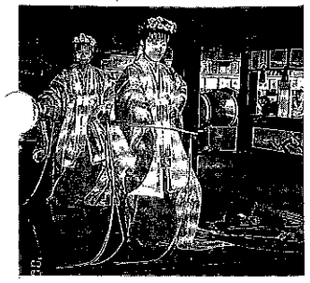
縁日大祭斎行

好天に恵まれた三月二十五日、二十六日に縁日大祭が斎行された。この祭典は、古来旧暦三月の祭礼日に五穀豊穣、家内安全を祈願する参拝者で賑わったと伝えられている。

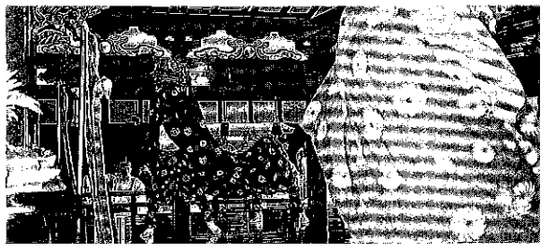
二十五日は、午前十時三十分より「春の縁日大祭」が厳粛に斎行され、責任役員、氏子・崇敬者総代をはじめ多数の参列を賜った。祭典終了後、午前十一時と午後二時より神賑行事が行われ、日本民謡協会　日南支部会員による「シャンシャン馬道中唄」、当神宮職員による「浦安の舞」、「鵜戸さん獅子舞」、舞楽「蘭陵王」が奉納され、参拝者も興味深けに見入っていた。

二十六日は、当神宮儀式殿においてシャンシャン馬道中唄全国大会の決勝が開催され、あわせてシャンシャン馬道中も再現された。

参道では両日、地場産品フェアーが開催。又、鵜戸神宮敬神婦人会による甘酒の振舞いも行われ、参拝者は海産物や農産物などの品物を買い求めたり、甘酒に舌鼓を打ったり喉を潤したりして、終日賑わっていた。



シャンシャン馬道中唄



鵜戸さん獅子舞

地場産品フェアー

甘酒の振舞い

別当宮司 先賢慰霊祭

第六代宮司　後藤幸平氏（昭和二十三年～二十九年）の代に、神仏合同の慰霊祭として位置づけられた別当宮司先賢慰霊祭が、五月二十二日午前十一時より、鵜戸山別当墓地において斎行された。

祭典には、歴代別当宮司遺族をはじめ多数の参列を賜り宮司祝詞奏上の後、願成就寺住職　川崎光俊氏（日南市）、王楽寺住職　甲斐芳文氏（宮崎市）の経が奏上され、御詠歌の法要に続き玉串拝礼が行われた。

シャンシャン馬道中唄全国大会開催
シャンシャン馬道中再現

昭和三十一年、当時の県民謡会会長　奈須美静氏が、「シャンシャン馬」と称されていた古謡を「シャンシャン馬道中唄」として作曲されて以来、今や全国的に愛唱されているこの唄の第十四回全国大会が、三月二十五日・二十六日の両日開催された。

大会は年齢ごとに壽年、高年、壮年、成年、少年一部・二部の七部門に分かれ、初日は日南総合運動公園多目的体育館で、予選が行われ（少年一部・二部を除く）県内はもとより鹿児島、福岡県などから四三〇名が参加。二日目は、会場を当神宮儀式殿に移し決勝が行われて、予選を勝ち抜いた一七一名と少年一部・二部の参加者で決勝が行われた。

当日は天気にも恵まれ、会場は民謡愛好家や参拝者で所狭しと埋まり、出場者は「鵜戸さん参りは春三月よ…」と、太鼓や三味線、尺八のリズムに合わせ声高らかに熱唱。会場からは、唄の終わるたびに大きな拍手が送られていた。

各部門の優勝者の中からグランドチャンピオンが選ばれ、今年は成年の部の那須記男氏（日向市）が栄冠に輝いた。

又、明治の中頃までは、結婚すると必ず当神宮へお参りをし、その帰りに一足ごとにシャンシャンと軽く鳴る鈴をつけた馬に、花婿が花嫁を乗せ家路に向かう風習があった。このシャンシャン馬道中の鵜戸さん参りが同大会に合わせて再現された。

今年は二十八組の応募があり、岡崎修司・純子さん（広島県）、江本崇彦・綾子さん（大分県）、朴東善・曹譽瑄さん（韓国）の三組が選ばれた。本殿にて正式参拝の後、シャンシャン馬道中唄全国大会決勝戦の参加者全員によるシャンシャン馬道中唄が合唱される中、花嫁が乗った馬の手綱を花婿が引き境内を一周した。

参拝者も単衣の着物、手甲、脚絆、草鞋ばきの新婚さんをカメラに収めたり、一緒に記念撮影をしていた。

日南サンフレッシュレディの任期を終えて

巫子　濵田　人美

毎年日南サンフレッシュレディが三名任命され日南市の観光PRに活躍しているのを、テレビ等で見て知っていましたが、はからずも私がその内の一人として、昨年の五月から一年間日南サンフレッシュレディを勤めさせて頂きました。

最初の頃は不安と緊張の連続で失敗もありましたが他の二名や周りの方に助けて頂き一年間頑張ってこれました。

主な活動は市外はもちろん県外で行われるイベントでのPR活動でした。一番心に残っているのが沖縄県那覇市で行われた那覇まつりです。このお祭りは、世界のギネスブックにも載る大綱引きや沖縄独特のリズムで太鼓をたたく郷土民芸エイサーの大パレード他、たくさんの行事が行われ私たちもパレードに参加し、大綱引きの上に乗って応援したりと貴重な体験ができたと思います。

最後になりましたが宮司様のはからいにより、日南サンフレッシュレディとして活躍させて頂く事ができとても良い経験をさせて頂きました。これからも学んだ事を生かしていけたらと思います。有難うございました。

巫子　濵田　人美
（写真中央）

燈籠奉納

今年も鵜戸の大神様の御恵に感謝し四件の奉納があった。それぞれ奉告祭が、宮司をはじめ奉納者参列の下、厳粛に斎行された。

斎行日、奉納者は次の通り。

一月十五日
安部道朗・照子御夫妻（日南市）より一基(1)

一月二十四日
サンポール会長　藤井一夫氏他三名より一基(2)

二月二十四日
鵜戸神宮敬神婦人会　冨澤節子、境　庸子、外山信子各氏より一基(3)

四月二十九日
河野春水、河野孝、河野孝弘各氏（日南市）より一基(3)

(1)

(2)

(3)

いさみ太鼓奉納

境内の木々も若葉に覆われ、渡る風もさわやかな季節となった五月五日のこどもの日、地元の子供たち五十名が御本殿、儀式殿前にていさみ太鼓を奉納。鵜戸の大神様と祖先の恩とに感謝すると共に無病息災を祈念した。

G・W期間中とあって参拝者も多く、そろいの鉢巻、法被姿の子供たちが元気にたたく太鼓、これに合わせて舞う子供獅子にしばし足を止め、カメラのシャッターを切っていた。

御神徳の教化

母君の豊玉姫命が御子（主祭神　鸕鷀草葺合不命）の育児の為、両乳房を岩窟にくっつけて行かれたと伝えられている「おちちいわ」は安産、育児を願う人々の信仰のより所となっている。

当神宮では、御神徳の教化を図る為、安産のお守りを受けられた方には案内状をさし上げ、出産された後にお守りをお納め頂き、乳児が健やかに成長されるよう、お守りをお送りしている。さらに一年後には、子供手形絵馬を送付致し、右手の分は自宅に保管して頂き、左手の分は当神宮に奉納頂いている。

これらのことを通じて、御神徳の教化となれば幸いである。

雅楽練習

当神宮では、毎月雅楽の練習を行い、曲の習得に努めている。最近日本の伝統文化を見直そうとする気運が高まりつつあり、雅楽にも目を向けられる方々が多くなってきている。

今年からは、教化活動の一環として小中学校等に出かけ雅楽を行い、少しでも関心を持ってもらえたらと思っている。

辞令

斎女　金丸　優子
（同）　井上まゆ子

願いに依り職を解く

（五月三十一日）